

成人看護学急性期実習における受け持ち患者手術室見学の 実習開始前自己学習目標と学習内容の分析

磯本 暁子*・柘野 浩子・塩見 和子・掛屋 純子・今城 仁美

新見公立大学看護学部

(2015年11月18日受理)

本研究では、成人看護学急性期実習における受け持ち患者手術室見学の自己学習目標と学習内容を明らかにし、今後の教育的課題について検討を行った。A大学看護学部看護学科の2012年後期から2013年前期の成人看護学実習（急性期）において、手術室見学記録終了後に提出された見学実習記録のうち、研究参加の同意が得られた学生の自己学習目標と見学後の実習記録の質的分析を行った。結果、学習目標では『手術室看護師の役割の理解』『不安の軽減』『リスク予測と安全な看護』『手術侵襲の予測』が抽出された。学習内容では『手術室看護師の役割の理解』『不安の軽減』『リスク予測と安全な看護』『手術侵襲の予測と看護』『周手術期を通じた継続看護』が抽出された。臨地実習指導者と学生との手術室見学実習目標の共有、学生の学習の学習目標に即した臨地実習指導者からの指導によって、学びが深化することが示唆された。さらに学びを深めるためには、手術室看護師、病棟の実習指導者、教員の連携が必要と考えられた。また、手術室見学が多職種連携による医療安全や手術進行への学び、合併症予防への学びを深めることが示唆された。
(キーワード) 手術室、見学実習、学生の学び

はじめに

我が国のがん罹患率は1985年以降増加傾向が続いており、今後もがん患者の増加が予測される¹⁾。固形がんの治療は、三大治療のなかでも手術療法が第一選択となる場合が多い。一方、急性期病棟においても在院日数の短縮化がなされ、短期入院のなかで質の高い周手術期看護を提供するにあたっては、看護基礎教育としての周手術期看護教育の重要性は増している。A大学看護学部では、手術を受ける患者の看護を修得する専門科目として、2年次後期に成人看護学援助論（急性期）を開講し、急性症状のある患者ならびに周手術期にある患者の看護についての学習を行っている。これに関連する臨地実習として、3年後期から4年前期にかけて成人看護学実習（急性期）のなかで、急性症状のある患者あるいは周手術期患者を受け持った実習を行っている。周手術期の患者を受け持つ学生は全体の6割程度で、受け持ち患者を対象にした手術室見学実習は、全体の3割程度の学生が行っている。手術室見学実習についての学習内容については、見学記録用紙に記載された内容を個別に把握しているが、学習内容全体の分析は行われていない。そこでこの度、受け持ち患者の手術室見学実習を行った学生の見学記録を分析し、自己学習目標と学習内容を明らかにし今後の教育的課題を検討した。

I 研究目的

成人看護学急性期実習における受け持ち患者手術室見学の自己学習目標と学習内容を明らかにする。

II 研究方法

1. 研究対象

A大学看護学部看護学科の2012年後期から2013年前期の成人看護学実習（急性期）において、手術室見学終了後に提出された見学実習記録のうち、研究参加の同意が得られた学生の見学実習記録を対象とした。

2. 調査期間

2012年9月～2013年7月

3. 分析方法

手術室見学実習終了後に提出された見学実習記録から、周手術期の自己学習目標と学習内容が記述された内容を抽出してコード化し、意味内容の類似性に従ってサブカテゴリーを構成し、カテゴリー化した。分析にあたっては共同研究者間で検討を行い信頼性と妥当性の確保に努めた。

*連絡先：磯本暁子 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

4. 倫理的配慮

対象学生には成績評価確定後に研究目的を伝え、参加の有無によって不利益は被らないこと、記録内容の分析拒否の申し出を受けて分析対象から外すこと、匿名性の保持、結果の公表を説明し同意を得た。分析結果を実習施設にフィードバックし、結果公表の許可を得た。

III 手術室見学実習の概要

1. 手術室見学実習の位置づけ

手術室見学実習は、成人看護学実習（急性期）で周手術期の患者を受け持つ学生が3週間の実習期間中において、患者の許可が得られた場合に実施する。

2. 実習目標

1) 周手術期に行われる特徴的な看護の実践を知り、その意味を理解する。

(1) 周手術期にある患者が最良の状態です術が受けられ、さらに予測される合併症を予防し、社会生活に向けて順調に回復できるための援助が実践できる（以下、最良な状態の手術への援助と合併症予防）。

(2) 周手術期及びクリティカルな場特有のリスクを予測し、安全に看護が実践できる（以下、リスク予測と安全な看護）。

(3) 手術室でのチームワークと手術・麻酔が患者に与える侵襲について理解できる（以下、チームワークと手術侵襲の予測）。

(4) 術中の看護の役割が理解できる（以下、手術室看護師の役割を知る）。

(5) 救急部、手術室、集中治療部との連携と継続看護の必要性が理解できる（以下、周手術期を通じた継続看護）。

2) 手術療法を受ける患者の看護に関する学習内容

(1) 周手術期における患者の身体的・精神的変化を学ぶ（手術侵襲による生体反応、危機、喪失の心理過程と対処行動）。

(2) 手術前患者の不安を理解し、心理調整の必要性が理解できる。

(3) 手術前の看護として、術前検査、オリエンテーション、術前準備、術前訓練、処置の目的を理解し、援助ができる。

(4) 手術中の麻酔導入から覚醒までの経過を理解できる。

(5) 術後急性期、回復期の観察と看護の必要性を理解し、患者の安全・安楽な術後の回復過程の援助ができる。

(6) 手術によってボディイメージが変容することを

理解し、その受容過程における看護の役割を学ぶ。

(7) 退院後、家庭・社会生活への復帰に必要な看護を理解し、退院時指導のできる能力を養う。

(8) 手術室の機能と看護の役割を理解する（以下、手術室看護の役割の理解）。

3. 実習時間

原則 8時30分～16時の実習時間のなかで実施する。

4. 手術室見学実習に対するオリエンテーション

学生には成人看護学実習（急性期）開始前に実習要綱をもとにオリエンテーションを行い、周手術期の実習目標の理解を促している。手術室見学の自己学習目標は、手術室見学開始前日に記録用紙に記載させ、手術室の臨地実習指導者に実習開始前に報告を行っている。

5. 手術室見学の時期

原則受け持ち患者が手術を受けるタイミングで見学を行う。午後の遅い時間帯での手術開始の場合は手術室終了、術直後の看護の見学が実施できない。金曜日の手術の場合は、術後1日目、2日目の看護が実施できない。

6. 見学の実際

1) 手術室見学の学習目標を手術室の臨地実習指導者に事前報告する。

2) 病棟における術当日の看護の見学を行う。

3) 病棟での術前準備を終えた後、患者に先行して更衣し、手術室看護師とともに患者の入室待機をする。

4) 病棟看護師から手術室看護師への申し送りには参加せず、患者・手術室看護師とともに手術室入室し、手術見学を行う。

5) 患者の手術が終了し、覚醒、気管内挿管抜管後は、手術室看護師から病棟看護師への申し送りは聞かず、すみやかに更衣・病棟にもどり、病棟回復室での見学を行う。

6) 実習終了後、見学記録用紙（A4 1枚）にあらかじめ実習前に立てた学習の実習目標と学習した内容や感想を記録し提出する。

IV 結果

2012年9月～2013年7月の期間に、手術室見学実習を行った24名のうち、12名の学生が記述した受け持ち患者手術室見学実習記録15シートを分析対象とした。

1. 実習開始前に掲げた手術室見学実習の自己学習目標分析の結果、66コード（以下「 』）、12サブカテゴリー

(以下《 》), 4つのカテゴリー(以下『 』, コード数を()内に示す)『手術室看護師の役割の理解(9)』『不安の軽減(12)』『リスク予測と安全な看護(34)』『手術侵襲の予測(11)』が抽出された(表1)。

1) 『手術室看護師の役割の理解』

このカテゴリーは、《手術の流れを知る》《手術室看護師の役割》から構成された。

2) 『不安の軽減』

このカテゴリーは、《コミュニケーション・声かけの実際》《不安緩和・軽減の援助》から構成された。

3) 『リスク予測と安全な看護』

このカテゴリーは、《術中安楽への配慮》《麻酔導入～覚醒までの援助》《術中の安全・医療事故防止》《体位・体位介助》《感染予防》《気管内挿管の方法・手順》の6つのサブカテゴリーから構成された。

4) 『手術侵襲の予測』

このカテゴリーは、《侵襲を受けた患者の観察》《術式》から構成された。

2. 学習内容

分析の結果、127コード、19サブカテゴリー、『手術室看護師の役割の理解(8)』『不安の軽減(21)』『リスク予測と安全な看護(55)』『手術侵襲の予測と看護(39)』『周手術期を通した継続看護(4)』の5つのカテゴリーが抽出された(表2)。

1) 『手術室看護師の役割の理解』

このカテゴリーは、《手術の流れの理解》《手術室看護師の役割》から構成された。

2) 『不安の軽減』

このカテゴリーは、《不安の緩和・軽減の援助》《苦

表1 実習開始前の手術室見学実習の自己学習目標

カテゴリー	サブカテゴリー(コード数)	コード例
手術室看護師の役割の理解	手術の流れを知る(4)	手術の流れを知る
	手術室看護師の役割(5)	手術室看護師の役割を知る
不安の軽減	コミュニケーション・声かけの実際(6)	声かけ、コミュニケーションの取り方
	不安緩和・軽減の援助(6)	不安の軽減
リスク予測と安全な看護	術中安楽への配慮(2)	術中安楽への配慮
	麻酔導入～覚醒までの援助(11)	麻酔の効果の確認方法
	術中の安全・医療事故防止(3)	術中の安全への配慮
	体位・体位介助(4)	体位の介助
	感染予防(7)	無菌操作の実際
手術侵襲の予測	気管内挿管の方法・手順(7)	気管内挿管の方法・介助手順
	侵襲を受けた患者の観察(3)	麻酔前後のバイタルサインの変化
	術式(8)	術式

表2 手術室見学実習の学習内容

カテゴリー	サブカテゴリー(コード数)	コード例
手術室看護師の役割の理解	手術の流れの理解(2)	手術の一連の流れが学べた
	手術室看護師の役割(6)	手洗い看護師と外回り看護師の役割が学べた
不安・苦痛の軽減	不安の緩和・軽減の援助(17)	入室時から声かけを行い不安軽減に努める
	苦痛の緩和・軽減の援助(4)	覚醒下で行われる手術患者への声かけによる不安軽減 苦痛緩和のための看護師の役割を学んだ
リスク予測とチームによる安全な看護	麻酔導入から覚醒までの援助(12)	麻酔効果判定の仕方がわかった
	気管内挿管の方法・手順(7)	安全に挿管を行うための手順がわかった
	患者・手術部位確認(2)	患者誤認防止に確認が頻回に行われていた
	安全に配慮した体位介助と確保(8)	安全確保のために体位は大人数でおこなっていた
	安全管理(9)	リスク低減のため事前の情報収集が行われている
	感染予防対策(5)	空調、滅菌操作、手術着等の感染予防対策がわかった
	緊急時の対応準備(2)	緊急時に対応できる薬品・物品の準備
手術侵襲の予測と看護	多職種連携による医療安全確保(4)	MEとの役割分担・連携で安全な手術が行える
	多職種連携による円滑な手術進行(6)	チームお互いの声かけが大切
	術中バイタルサイン観察の重要性(6)	術中の処置でバイタルの変動があり全身状態の観察が重要
	合併症予防(11)	体温低下の原因と体温管理の重要性が学べた
	侵襲による術後観察の重要性の理解(5)	手術侵襲による術後の血尿の観察が重要
	術式・術中検査(11)	教科書ではわからない手術の実際が学べた
周手術期を通した継続看護	生活の質を考えた術式の理解(6)	骨切断面をやすりで削り断端部の組織損傷と疼痛を軽減する
	周手術期を通した継続看護(4)	病棟・手術室・回復室・病棟がそれぞれ情報共有することが重要

痛の緩和・軽減の援助」から構成された。

3) 『リスク予測と安全な看護』

このカテゴリーは、《麻酔導入から覚醒までの援助》《気管内挿管の方法・手順》《患者・手術部位確認》《安全に配慮した体位介助と確保》《安全管理》《感染予防対策》《緊急時の対応準備》《多職種連携による医療安全確保》《多職種連携による円滑な手術進行》の9つのサブカテゴリーから構成された。

4) 『手術侵襲の予測と看護』

このカテゴリーは、《術中バイタルサイン観察の重要性》《合併症予防》《侵襲による術後観察の重要性の理解》《術式・術中検査》《生活の質を考えた術式の理解》の5つのサブカテゴリーから構成された。

5) 『周手術期を通じた継続看護』

《周手術期を通じた継続看護》から構成された。

V 考察

1. 実習開始前の手術室見学の自己学習目標

手術室見学実習では、実習目標のなかから重点的に学びたい自己の学習目標を明確にし、学びの深化を目指している。実習要綱に提示している5つの実習目標は、(1) 最良な状態の手術への援助と合併症予防、(2) リスク予測と安全な看護、(3) チームワークと手術侵襲の予測、(4) 手術室看護師の役割を知る、(5) 周手術期を通じた継続看護である。実習要綱の目標と抽出されたカテゴリーとの対比から考察を行う。

(1) 最良な状態の手術への援助と合併症予防という目標に関しては、手術室における『不安の軽減』による最良な状態での手術への援助が自己学習目標としてあげられていた。コード数は12で、最も緊張し不安が強い手術室での患者の不安を軽減するための看護に対する学生の関心が伺えた。一方、手術によって身体侵襲が加わり、苦痛が生じる状況があるにもかかわらず、身体的苦痛には目が向けられていなかった点については、手術室での身体的苦痛についてのイメージ化がはかられていないことが考えられた。また、合併症予防に関する自己学習目標については記述がなく、周手術期において合併症予防看護は、術前あるいは術後に行われるという理解が学生にあることが伺えた。

(2) リスク予測と安全な看護に関しては、『リスク予測と安全な看護』が学習目標としてあげられていた。カテゴリー全体でのコード数は、『リスク予測と安全な看護』が34と最多であった。麻酔導入から覚醒までは、筋弛緩、意識消失、人工呼吸開始、手術、自発呼吸の再開、覚醒、気管内チューブの抜管と、患者の状態が大きく変化する時期である。このように

様々なリスクが考慮されるべき時期においての、迅速かつ正確な援助による安全な手術が行われるための看護に対しての関心の高さが伺えた。

(3) チームワークと手術侵襲の予測という実習要綱の目標に対しては、『手術侵襲の予測』があがったが、コード数は11であった。手術の目的は疾患の治療であるが、少なからず侵襲を伴う治療であること、リスクを考慮した看護が重要であることについての理解を促す必要がある。2年次の成人看護学(急性期)の講義内容を検討し、手術による侵襲によって、患者にどのようなリスクが生じるかに対する理解を深める授業改善を行い、さらに急性期実習指導においては手術侵襲とリスクに関心が高まるような意図的な関わりが必要と考える。さらに、実習開始前の自己の学習目標にはチームワークに関する目標があがっておらず、手術室におけるチーム医療についての教授内容を検討する必要がある。

(4) 『手術室看護師の役割を知る』は、(1) 最良な状態の手術への援助と合併症予防、(2) リスク予測と安全な看護、(3) チームワークと手術侵襲の予測、(5) 周手術期を通じた継続看護の4つの目標全てが手術室看護師の役割である。学生の学習の深化を目指す目標としては枠組みが大きいので、手洗い看護師と外回り看護師の役割を知る等、より具体的な目標を検討していく必要がある。

(5) 『周手術期を通じた継続看護』は学生の学習の実習目標としてあがらず、手術室見学実習の学習目標としての認識が低い目標と考えられた。『周手術期を通じた継続看護』については、学生の関心が術中の看護に集中し、術前・術中・術後という3つの時期を含めた周手術期看護に目が向かなかつたと考えられた。患者には外来・病棟・手術室という場を通して、術前・術中・術後の全期間に渡る統一された継続看護が必要であり、外来・病棟・手術室の連携についての視点も重要である。『周手術期を通じた継続看護』に関しても2年次の成人看護学(急性期)の講義内容を検討し、理解を深める授業改善を行っていきたい。

2. 実習開始前の手術室見学の自己学習目標と手術室見学の学習内容

手術室見学実習では学習目標を掲げ、実習開始前に手術室の臨地実習指導者に目標を伝えている。実習開始前の自己学習目標(表1)と学習内容(表2)のコードを比較すると、学習目標のコードは、2~3つの単語で端的に記されているのに対し、学習内容のコードは具体的な記述で文章化がなされていた。またコード数からみても、学習目標は66コード、学習内容は127コードと倍増し

ていた。単語から文章への変化、コード数の増加は、学習内容の深化を示しており、これは手術室の臨地実習指導者と学生との目標の共有、学生の学習目標に即した、臨地実習指導者による指導の結果であると考えられた。一方、小澤ら²⁾は、手術室実習に対する手術室看護師の期待として、実習指導者の積極的な関わり、学習意欲を高める教員の関わりをあげており、手術室での学びを深めるためには、手術室看護師、病棟の実習指導者、教員の連携が必要と考えられる。

3. 周手術期の実習目標に対する実習開始前の自己学習目標と手術室見学実習の学習内容との対比

- (1) 最良な状態の手術への援助と合併症予防という目標に関しては、手術室における『不安・苦痛の軽減』による最良な状態での手術への援助を学ぶことができていた。実習開始前の自己学習目標においては、不安だけに焦点が当てられていたが、手術室見学を行うことで患者の苦痛の緩和に看護者としての視野が広がっていた。手術室見学における合併症予防に関する学生の理解は、術中の手術侵襲と関連づけて理解されていた。成人看護学援助論（急性期）の講義では、合併症は、手術侵襲による生体反応と回復過程、回復遅延と関連づけて教授している。講義での教授内容と周手術期の実習目標の一致を図り、合併症予防が手術侵襲の影響とともに理解を深められるように、(3) チームワークと手術侵襲の予測としている目標を、手術侵襲と合併症の予測、予防として、関連づけて理解が深まる目標の検討をする。
- (2) リスク予測と安全な看護に関しては、カテゴリー全体でのコード数は、『リスク予測と安全な看護』が55と最多であった。学習目標でも最多のコード数で関心の高い目標であったが、サブカテゴリーで検討すると、《緊急時の対応準備》《多職種による医療安全確保》《多職種連携による円滑な手術進行》の3つのサブカテゴリーが、学びとして加わっていることがわかった。病棟においても多職種連携による医療は提供されているが、手術室という場に多職種が一堂に会しての連携によって、安全な医療が提供されている場面に肌で感じられることが、学びに大きく影響していると考えられた。多職種連携によるチームワークは、実習要綱の周手術期の目標としては、(3) チームワークと手術侵襲の予測として掲げている。しかし、学生の学習内容では、多職種連携とそのチームワークによる円滑な手術進行と医療安全確保が関連づけて理解されていた。手術室におけるチーム医療は、多職種連携による生命の安全保障が目標³⁾であり、チームワークの理解については(3) 手術侵襲と同項目であげるのではなく、(2) のリス

ク予測と安全な看護とともに学習目標とすることで、実践の場での目標に則した理解につながると考えられる。

- (3) チームワークと手術侵襲の予測に関しては、実習開始前の自己学習目標においては『手術侵襲の予測』であった。学習内容においては『手術侵襲の予測と看護(39)』として抽出された。サブカテゴリーで検討すると、学習目標では《術式》であった記述が、学習内容においては《生活の質を考えた術式の理解》と記述内容が変化していた。また学習目標にはあげられていなかった《合併症予防(11)》が学習内容として加わった。手術室見学が、講義で用いている図や写真、説明だけではイメージしにくい手術侵襲による合併症に対するイメージ化の大きな助けになったものとする。しかし、《侵襲による術後観察の重要性の理解(5)》は手術見学によってもコード数が増えていなかった。木村ら⁴⁾の調査でも、術後看護につなげることができるという目標の認識が低いことが明らかとなっており、手術侵襲の理解と術後への影響、術後観察の重要性について学びを促進するための教授方略の検討を要する。これに対しては、術直後の回復室看護の見学機会の確保がまず必要であろう。次に、手術室の見学のタイミングによっては、手術終了から術直後の見学が困難なため、場面に応じて見学機会の調整を行うことが求められる。さらに、イメージしにくい手術侵襲の理解を促すために、指導は機を逃さず行い、術後の看護につながる学びを促進する必要があると考える。
- (4) 手術室看護師の役割を知るという目標は、他の目標より大きな枠組みであり、実習開始前の自己学習目標を立てる段階に掲げやすい目標と考えられる。サブカテゴリーでは学習内容として《手洗い看護師と外回り看護師の役割が学べた》が抽出されており、見学によって役割をより明確に学べたことが伺えた。
- (5) 『周手術期を通した継続看護』は学生の事前の自己学習目標として掲げられておらず、学習内容としてもコード数がほとんど増えないままとなった。見学の実際から検討すると、手術室での手術に対する一連の見学を中心に構成しており、病棟での術前準備を終えた後の手術室への入室時の申し送り、手術を終え手術室から病棟の観察室への帰室時の申し送りへの参加が困難である。申し送りに参加することが困難なために、病棟における看護と手術室における看護の連携と継続看護について学ぶ機会を逸していることが考えられた。これについては、手術室入室時申し送り、手術室退室時申し送りの見学機会を設けることで、学びが得られるものとする。今後、実習施設との調整を図り、患者の了解のもと、でき

る限り見学の機会を設けていきたい。

文献

- 1) 独立行政法人国立がん研究センターがん対策情報センター：がんの統計2015年9月15日アクセス, http://ganjoho.jp/data/reg_stat/statistics/brochure/2014/
- 2) 小澤尚子, 原島利恵：手術室看護師が経験した手術

室実習の困難感と期待. 岩手県立大学看護学部紀要, 17, 13-23, 2015.

- 3) 林尚子, 佐藤まゆみ編：成人看護学急性期看護 I 概論・周手術期看護 (第2版), 南江堂
- 4) 木村美津子, 中嶋真澄, 平井純子：成人看護学実習における手術室見学学生への学習内容提示による学習効果. 神奈川歯科大学短期大学部紀要, 1, 25-31, 2014.

Akiko ISOMOTO, Hiroko TSUGENO, Kazuko SHIOMI, Junko KAKEYA, Hitomi FUKUMOTO